



紀倍神社のオニヒバ  
福井県指定天然記念物

【福井県坂井市春江町木部西方寺・紀倍神社】

樹 種：ヒノキ

主 幹：目通り 3.1 m

樹高約：15 m

枝張り：東西 21 m、南北 15 m

樹 齢：400 年以上

紀倍神社鳥居脇の「オニヒバ由来記」によると、大昔この辺りは湿地帯で、水鬼と呼ばれる怪物が出没して農民を困らせていたのを、水鬼討伐隊に比叡山の僧侶隊も加勢し退治したのが1200年ほど前。水鬼を葬った塚に植えたヒノキは信長の異神仏焼払いで焼失し、今境内にあるヒノキは焼跡に植えた2代目であると書かれている。

地上3mくらいから4本に幹分かれして上に伸びている。葉の付きも悪く枝枯れも目立つ老木だが、福井県にはヒノキの巨木は少ない。

(福井県支部)

参考「ふくいの巨木」小林則夫編 (福井県自然保護センター 1992.3 発行)



**謹賀新年**

一般社団法人日本造園建設業協会

会長 和田 新也

平成三十一年の年頭にあたり

新年明けましておめでとう  
ございます。

皆様には、穏やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。この一年が、皆様にとって、素晴らしい年になりますよう、また造園建設業界にとつて明るい年になりますよう、心から祈念しております。

さて、わが国の社会・経済状況は、今、大きな歴史の転換点を迎えています。今年は、皇位の継承、来年は、オリンピック・パラリンピック。アベノミクス「改革の矢」により、この六年間、経済再生に向けた様々な取組が実施されてきました。今後の最大の課題となる人生一〇〇年時代を視野に、少子高齢化の克服に向けて、「生産性革命」、「人づくり革命」、女性が輝く社会、お年寄りも若者も、誰もが生きがいを感じられる「一億総活躍社会」が平成のその先の時代に向かって、本格的に動き始めています。

造園業界を取り巻く状況は、「担い手3法」を契機に、経営環境が大きく改善の方向に向かっていていると感じております。このような中、国においては、「担い手3法」に関連する新たな取り組みや「働き方改



革」による長時間労働の是正・週休二日制の推進、また、外国人材受入れの新たな制度創設など、様々な取り組みが進められています。このような国の動きに対し、日造協としては、会員が一体となり、これまで培ってきた「造園力」を発揮できるよう、的確な対応をしていきたいと考えています。また、造園業界を支える担い手の中長期的な育成・確保に向けて、他の業種分野にはない独自の多面的な取り組みの展開・強化も一層進めていく必要があります。

さらには、将来に目を転じ、災害時における復旧・復興支援活動の展開、都市公園や道路緑地などの整備・管理技術の向上をはじめ、観光・地域創生や海外日本庭園の保全・再生など新たな政策動向に対応した戦略的展開も図らねばなりません。

造園業界に身を置く者や入職を希望する若者達が、やりがいを感じ、誇りを持てる明るい未来の魅力ある環境づくりに、この一年、皆様とともに取り組んでいきたいと考えております。

皆様のご指導、ご協力、ご支援を宜しくお願い申し上げます。



# 自然と地域を活かす造園の知恵と技術

2019年 新春座談会

# 造園力による防災・減災、地域活性化への展望

激化する気候による豪雨、地震などによる災害が多発し、安全・安心の確保から社会資本の保全や見直しが進められています。造園建設業は、避難地や復旧の拠点となる公園緑地の整備・管理を日頃から行い、自治体との防災協定など、非常時の対応も担っています。さらに近年は、グレーインフラからグリーンインフラへの転換、"絆" コミュニティの形成が求められ、企画・提案から管理・運営を通じて、より良い地域づくりに取り組んでいます。こうした中、座談会では、「自然と地域を活かす造園の知恵と技術」をテーマに、「造園力による防災・減災、地域活性化への展望」を語っていただきました。その概要を紹介します。

## 座談会出席者

- 荒井 一行 氏 日産緑化(株) (東京都支部、事業委員会人材育成部会)
- 石出慎一郎 氏 東洋緑化(株) (宮城県副支部長、技術委員会副委員長)
- 落合 直文 氏 (株)文化環境設計研究所 ((一社)ランドスケープコンサルタンツ協会、(公財)都市緑化機構 防災公園とまちづくり共同研究会運営委員長)
- 藤田 良司 氏 (株)九州造園 (福岡県支部長、国際委員会副委員長)
- 正本 大 氏 みずえ緑地(株) (中国総支部長、事業委員長)
- 丸山 浩司 氏 西武造園(株) (東京都支部、東京臨海広域防災公園管理センター長)
- (司会) 野村 徹郎 (一社)日本造園建設業協会 技術・調査部長
- オブザーバー：和田 新也 (一社)日本造園建設業協会 会長
- 高梨 雅明 (一社)日本造園建設業協会 常任顧問
- 成家 岳 (一社)日本造園建設業協会 総務委員会広報部会長

## 日々の業務と災害体験について

野村 今日は、災害体験から、将来展望までお聞きしたいと思いますが、まず、自己紹介と今回のテーマと関連した体験を少しお話いただければと思います。

荒井 事業委員会人材育成部会に参加しています。そのほか、造園学会の企画委員、日本自然保護協会の自然観察指導員をしており、会社では営業企画部にて、官民間問わず、お客様への技術提案などを行っています。

災害の体験は、東日本大震災のとき、会社に一晚泊まったくらいですが、趣味の溪流釣りで山に入ることがあり、沢の増水で怖い思いをし、自然のありがたさと怖さは実感しているつもりです。

また、本日は首都圏に勤務する者の立場でも発言できればと思います。

石出 マツヤマキの仕立物の生産地である千葉県八日市場の生産者の家に生まれ、ずっと造園関係の人生になります。

縁あって仙台で会社を経営し、東日本

大震災を経験しました。橋の上であまりの揺れに車を出てガードレールにしがみつ き、日本が沈没するのではないかと 思ったほどでした。災害対応などは流れの中で話せればと思います。

落合 ランドスケープコンサルタンツ協会や都市緑化機構・防災研の立場から、参加させていただいたと思いますが、総合コンサルの日本技術開発を経て、平成29年に今の会社を起業しました。

前の会社は土木が主力でしたが、ランドスケープにも力を入れ、防災公園などの設計をしていました。その頃から造園は防災より減災だと思っており、近年、減災の考え方が普及し、造園の活躍を期待する一方で、他の分野に埋もれてしまうのではないかと心配もしています。

防災研は、平成7年の阪神・淡路大震災の直後、防災的な取り組みを活発化させようと発足し、現在、会員15社とピーク時の3分の1です。これは、一定の役割を果たし、成果が普及、一般的なことになってきたからだと思っていますが、一般的になったところで、どう取り組むかが課題で、後でお話したいと思います。

藤田 北九州の小倉から来ました。福岡県支部長、国際委員会副委員長として、楽しく活動していますが、学生時代は京都にいたものの造園出身ではなく、庭園はデートで行っただけでした(笑)。

経済学部出身ということもあり、私は「世のため人のためになるビジネス」が大事だと思っています。公共造園であれば、整備から管理まで原資は税金で、私たちの仕事は十分に社会還元されていま

す。しかし、インバウンドの方々が訪れる場所づくり、医療費が増大する中で予防にもなる空間づくりなど、もっとできます。

地元の災害は台風と大雨対策がほとんどです。被災や喪失した社会資本や環境の回復は、多額の税金を投入することになって大変です。造園が提案している減災は、初期投資は必要ですが、その予防になり、結果、トータルコストを下げられます。

グリーンインフラという言葉が聞かれなかった十数年前から、北九州市とともにLID(低影響開発)に取り組んできたので、後でお話できればと思います。

正本 中国総支部長、事業委員長をしています。普段の仕事は、経営から営業兼現場、ボランティア、小学校での指導など、いろいろ携わります。

日造協のポスター「造園の仕事」で災害復旧の写真がありますが、これは広島の水害復旧の様子です。こうした復旧・復興は、どうしてもしなければならず、誰もが納得する業務ですが、いかに生活への影響を少なくするかという減災への取り組みが大事です。今日は、そのあた

## 実体験から得た課題と改善に向けて

野村 将来展望の話も出ていますが、災害体験からの課題はいかがですか。

石出 平成7年の阪神・淡路大震災で防災意識が広がったと思います。しかし、どんな災害かは起きるまで分かりません。

東日本大震災の時に、見晴らし台からヘリコプターで救助された映像が何回も出てきました。あれは弊社で指定管理をしている荒浜の海岸公園で、災害時に避難する場所はここですと防災訓練をしていても、公園は誰が利用しているか分かりません。海に近づかないでと言っているのに、浜辺の公園に行ってしまったら、人は決まった行動をせず、マニュアルや訓練とおりにいかないことがたくさんあります。

災害時に欠かせないのは、判断力と行動力で、それを養うのは経験です。訓練とおりにはいきませんが、過去の災害や日頃からいざというきを想定しておくことが大事です。造園の人は、山やキャンプが好きな人も多く、自然にも敏感で、こうした知識や経験が役に立ちます。

災害は、季節も昼夜も問いません。防災の日の訓練が全国的に行われていますが、時間や季節を変えて行うことで見えてくるものもあります。公園に泊まろうというイベントもしていますが、そういうことがいざというときに役立ちます。

また、震災を振り返って、一番困るの



石出慎一郎 氏

りの話を深めていければと思います。

丸山 防災体験ができる東京臨海広域防災公園に勤め、年間30万人の方に来ていただいています。この公園は、非常時に国の緊急災害現地対策本部などになるため一般の避難場所にはならないという特殊な公園です。

災害の実体験はなく、阪神・淡路大震災は中学生のときで、その時の衝撃は覚えています。座談会は初めてなので、皆さんのお話を聞きながら、勤務先での取り組みなどをお話できればと思います。

は水です。公園の水道なども使えなくなるので、井戸を掘り手押しポンプの設置や、夏は木陰がないととても過ごせないで、広場的でありながらも緑陰が得られるようなしつらえも大事です。

こうした公園のソフトとハードを一体的に考えられるのが造園だと思っています。

正本 いつも台風災害は怖いと思っていましたが、十数年は直撃を受けていませんでした。平成30年7月6日の大雨は、広島県だけでなく、広域災害となりました。その日はダンプで走っており、目の前の斜面が崩れ、巻き込まれそうになりながら会社に戻りました。

平成26年8月の土砂災害は地域限定でした。市民ボランティアの方々も大勢おり、土砂の袋詰などの作業は進んでいましたが運ぶ手がおらず、狭いところに入っていく作業を得意とする造園業界がミニショベルやキャリアカー、軽ダンプを拠出・対応しました。

しかし、今回の災害は造園業界にとってメンテナンスの超繁忙期である7月で、被害も広範囲に及び、緊急対応が大変困難な状況でした。今後、災害時には、メンテナンス業務は後回しにしているなど、行政との契約形態の見直しも必要と考えます。

まだ、災害の復旧が完全にできていない中で、除草や高木剪定などを行っている光景は異様でした。業務をまっとうし



荒井 一行 氏

北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	山梨県	長野県	新潟県	富山県	石川県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県	福井県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	岡山県	広島県	鳥取県	島根県	山口県	徳島県	香川県	高知県	愛媛県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県
四宮	三浦	米内	古積	鈴木	今野久仁正	諸井	水庭	増田	山田	森川	鈴木	鈴木	田口	依田	山寄	磯部	久郷	北 総一朗	小栗	内山	中嶋	水谷	宇坪	上田	茨木	坂上	橋本	中島	的場	小林	福島	西谷	持田	多々良健司	関	藤田	植田	高須賀盛満	藤田	久保	田雑	佐藤	栗木	下湯	井上	森根
繁	利史	吉榮	昇	和男	道雄	博	博一	忠雄	昌紀	一彦	義人	正典	忠	信幸	久人	慎治	達弘	晴芳	和幸	誠	啓造	春海	信明	和幸	信明	涉	祥之	盛州	和義	慶一	勝之	正樹	正義	秀樹	誠司	良司	和男	豪裕	保夫	康一	一弘	恒治	清昭			

支部長







## 2019年 新春座談会

## 造園力による防災・減災、地域活性化への展望

また、災害時は対策本部となるため、一般利用はしませんが、リアルな災害体験として、かまどベンチを使ったイベントなども行っています。



正本 大氏

冬の寒い日に実施しましたが、うまく火が起こせず、お湯も沸きません。先ほど話に出ましたが、経験がいかに大事かを皆さん痛感してくださいませ。

**正本** 今の子どもたちは自由に使える広場がなくなり、自由発想の遊びがしにくくなっています。

しかし、一昨年の都市公園法の改正などもありますが、もっと公園を活用しようという時代になっています。あれもだめ、これもだめではない公園から大きく転換しようとしています。

日本で一番古い世田谷の羽根木プレーパークのように、広島のパレーパークでも交渉を続け、様々な活動ができるようになってきました。

**藤田** 北九州市で「山田緑地×パルパーク・プロジェクト」が進んでいます。パ

ルパークは、「子どもたちにたくましく生きていく力を！」をコンセプトにしたアウトドア雑誌「BE-PAL」の企画です。

そのプロトタイプが、富士植木さんの千葉の圃場でつくられ、雑誌に毎月その様子が連載されましたが、当初はなかった焚き火ゾーンも加えられました。

山田緑地のパルパークは、参加者自身が作り上げる公園として、森からとってきたカズラを編んだブランコのある遊び場があり、間もなく焚き火の学び場もできます。体験の場も必要ですね。

**荒井** 雪国の方には笑われますが、東京など2、3cmの雪で、交通が麻痺したり、けがをする人が出ますが、これも経験不足と言えるかもしれません。

一方で、ハード自体が単一機能で効率化し過ぎたため、いざというときに脆く

なっていることもあります。河川の整備で洪水は減りましたが、地面が舗装で覆われ、下水道に頼り切っていたため、都市でもガード下や低い場所で、水害が起きるなどしています。

**藤田** 広い視野での計画的なまちづくりがこれからますます必要です。大手デベロッパーさんなどは、災害なども踏まえた計画を行います。古くからの市街地や地方では、自治体が勉強していないと、なかなか改善や新たな計画ができず、事業者への指導もできません。

グリーンインフラの事例を集めたいと思いますが、今まで興味を持ってくれた方が少ないのが実情でした。

日造協でやってほしいと思います。

## グリーンインフラと技術の標準化で普及を

**野村** AIPH（国際園芸家協会）が、「グリーンシティ」を掲げ、緑にあふれたきれいな街として、グリーンインフラを含めた世界的なデータベースを作ろうとしています。

日造協は、日本を代表して AIPH に参加しているので、日造協でまとめているのもいいかもしれません。防災研などでの動きはありますか。

**落合** グリーンインフラはありませんが、防災公園の事例収集はしています。

「防災公園技術ハンドブック」を2000年と2005年、「施設資料」を2004年に作成し、これらをまとめた「防災公園技術ハンドブック 防災公園・施設資料集」を2015年に発行しています。

平成27年9月に国総研が、防災公園の計画・設計に関するガイドラインを改定し、ホームページからダウンロードできます。また、防災にはコミュニティも重要という話が出ましたが、コミュニティを踏まえた管理の充実について、平成29年に一部改定が加えられました。

これを踏まえて、防災研では、ガイドラインで書き切れないことを加えた副読本となるよう「ハンドブック」の改訂版の発行に取り組んでいるところです。

先ほどの防災訓練のお話で、公園の鍵の話が出ましたが、消防用の共通キーがあり、私が設計する場合は、共通キーを使用して、統一するようにしています。

こうしたことも知られていませんが、技術の標準化は大切です。標準化は、技術開発への規制と誤解されたりしますが、標準化した方がいいものと、独自でもいいものの整理が必要です。世界的に技術の標準化が進められていますが、造園は少し遅れているかもしれません。防災研は標準化のプラットフォームの1



野村 徹郎氏

つでありたいとも思っています。

小金井市では浸透桝と書いていなくても浸透桝にするのが当たり前、つまり標準になっています。こうした状況になるといいと思います。

**野村** 浸透桝は、昭和記念公園での実験が一つの契機となり普及したと聞きました。実験に参加したメーカーの方が無理と思われていた江東デルタで実験したところ、地下水面が広く、1mmの水位上昇でも相当量が浸透することが分かったそうです。

**正本** 植栽基盤も厚みがあれば、保水性が増し、樹木の生育環境も良くなります。そういう取り組みが必要ですね。

**野村** いろいろと研究されてきた藤田さんいかがですか。

**藤田** 国土交通省から福岡空港近くの高速度道路下が殺風景なので緑化できないかという話をきっかけに、何度も失敗しましたが、高速度道路上の雨水を地上に誘引し、透水タイプのU字溝に流して、土壌に浸透させる方法で緑化しました。

## 造園からの提案と発信で具体的成果を！

**野村** 提案と発信が大切とのことですが、皆さんいかがですか。

**落合** 国や自治体の造園職の方には通じやすいですが、土木職、事務職の方だと難しいことがあります。ここでも技術や考え方の標準化は大事で、一企業より、団体の提案の方が受け取りやすいと思います。

**正本** ダムなどの工事でも、サクラを植えることは多く、桜守として土木関係者や市民の方が集まっているところで話をしたとき、造園屋さんはそういうことを考えて木を植えていたのかと言われました。受発注の関係ではないところでの地道な活動も大切だと思います。

企業の森など、山での活動もしていますが、ここでは緑の効能などを分かってもらい取り組みをしています。

また、小学校では、「樹木博士になろう！」などの環境学習を15年続けており、学校にある木を自分たちで良くしていこうと土壌改良や剪定もしています。そういうことを続けていけば、分かってくれることもあります。ダイレクトではありませんが、少しずつ緑のファンをつくることも造園人の重要な仕事です。

**野村** 杜の都の石出さんどうですか。

その後、この工法を日造協から北九州市に提案し、モノレールの駅下でも実施しました。この事業によって雨水を地面に浸透・貯留させて、川の負担を軽減するモデルを実証しました。そして、ビジネスにしないといけいないので、日造協として技術提案を行い、造園工事になりました。

一方、北九州市の都市高速の下も下水道直結だった雨水を高架下に活用し地被で緑化しました。ただ、ここは油断して土木発注になってしまい、造園工事はヘデラの植栽だけになってしまいました。

河川敷への提案も行いました。洪水対策として板櫃川の河川敷を広げて貯水し、普段は広場として利用しようというもので、増水時に芝が流されないようネットを固定し、それに芝の根が絡む方法を大分県支部で提案し、造園からの技術提案で、躯体は土木工事になりますが、通常の親水部分は造園工事になりました。

昨年大雨では、2km下流で、溢れるまであと10数cmという危険水域まで達しましたが、ここは大丈夫でした。

**石出** 標準化ではないですが、当然のこととして理解が得られているとやりやすいですね。

理解を広げる点では、日造協の造園フェスティバルも有意義な機会ですし、地域の農業高校との交流も大事にしています。

また、美味しい牡蠣は豊かな山があるおかげと植林を続ける畠山さんの「森は海の恋人」運動は有名ですが、造園以外の方が木々や自然の大切さを訴えることも多くなっていると思います。

関東大震災後の復興に対応できる人材を育てようと上原敬二先生が東京高等造園学校をつくられました。こうした先達の想いも含めて、将来に向けて造園の仕事をしなければならないと思います。

**荒井** 造園と違う分野の方が、造園に関心を持ってくれています。

造園学会は産官学の方がいますが、造園産業界は少なく、いろいろと呼びかけていますが、なかなか造園産業界からの参加者は増えず、増えているのは、土木、建築の方々だったりします。

研究論文だけでなく技術報告集、作品選集などもあるので、もっと造園産業界が参加し、発信されるといいと思います。

北九州市の造園団体では、修景協会とタイアップして専門家をお招きして毎秋にシンポジウムを開催してグリーンインフラの啓蒙につとめています。

我々が提案するよりも学識経験者が発信の方が効果的だと思います。

こうした取り組みで、当初の担当者が退職された後も事業が継続しています。そういう発信を続けていくことが大切だと思います。継続は力ですね。



丸山 浩司氏

**丸山** 私は転職し、今の会社に入るまで、公園で働いている人がいるということ自体知らず、こういう仕事があるんだと驚きました。

造園学を専攻していない多くの学生に、造園という世界の魅力はうまく伝わっていないように思います。とても魅力的な仕事なのに残念です。もっと積極的に造園の魅力、楽しさを伝えていきたいと思います。

もちろん、そこには防災・減災技術も含まれます。

**藤田** 私たち造園は、世の中のためになる仕事をしています。どんどん提案や素晴らしさを伝え、ビジネスにも結びつけ、さらに、世の中に役立つよう胸を張ってやっていきたいと思っています。

**野村** 防災・減災から、コミュニティの形成、インバウンド対策まで、造園にできることはたくさんあり、その提案とともに、どう発信していくかが大事であると、今後の展望をいただきました。

この紙面から造園の役割が多くの方に伝わり、具体的な成果につながっていったらいいと思います。本日はありがとうございました。

## 事務局人事

(12月1日付)

上席調査役＝藤吉信之（新規採用職員）